

高野山古地図を利用した追記可能なデジタル教材の作成

Developing Digitalized Teaching Materials
Based on the Old Maps of Koyasan山陰加春夫 藤吉圭二
高野山大学文学部

Abstract: The old maps of Koyasan are expected to play an important part in the study of the history of Koyasan, one of the oldest centers of Japanese Buddhism. They have not been, however, so accessible for two reasons. First, most of them are part of Koyasan's cultural heritage and not study materials. Secondly, many of them are so large that you cannot examine them easily. Taking photographs and digitalizing the maps through high-definition technology enable one to examine them freely on a computer monitor, without fear of destroying cultural treasures. Thanks to digital technology, even the layman can have access to this cultural heritage, and the whole world can have access to this heritage through the Internet. One more advantage to digitalization must be added: the digitalized contents of the old maps of Koyasan on the Internet need to be followed by some sort of explanation and that would encourage students to display the results of their research about the history of Koyasan. Digitalizing is an efficient way to have access to these historical visual materials.

Keywords: digitalized visual aids, cultural heritage, digital archives, high-definition technology, old map of Koyasan

1. 問題の所在

古文書類にせよ絵図類にせよ、歴史的、文化的に貴重な史料は、研究・教育の素材としてのみならず、文化財としても貴重であり、専門家でも従来その利用は強く制限されていた。

特に絵図類はサイズの大きなものも多く、研究・教育への活用は困難だった。古文書ならばマイクロ撮影された写真でも文字の判読は十分可能だが、絵図類の場合、大判の図録に収録した写真であっても、細部がどうしても潰れてしまい、詳細な閲覧は難しい。現物の利用は専門家の場合でも制限された条件のもと短時間に限られるのが普通で、一般の学生の利用は現実的な問題とはなり得なかった。

古文書に記録されていることを整理して改

めて絵図類でその状況を確認するという作業は、歴史資料活用に対する学生の意欲の喚起に大きな効果を持ち、貴重資料を所蔵する教育研究機関にとって積極的に取り組むべき課題と言えるが、従来は資料の文化財としての貴重性がそれを阻んでいたといえよう。

高野山大学は、日本の国宝・重文類の1割近くを集中的に保存する高野山にあり、日本の歴史や文化を学ぶにあたり、「本物に囲まれながら学べること」を一つの魅力としてきたが、実際には、「本物に囲まれること」と「本物を利用できること」との間には小さからぬ隔たりがあったと言わざるをえない。本研究は、そうした隔たりを埋めていくステップとしての意味を持つ。また、新たに解明された資料をデータ化して古地図に書き込んでいけば、それによって、いわば「自己増殖的」にデジタル教材を発展させることが可能である。

Kazuo Yamakage and Keiji Fujiyoshi*
Koyasan University
*E-mail: fjosh@koyasan-u.ac.jp



図1 「高野惣山之絵図」部分拡大図
1.5m x 3.5mの中に細かい文字で寺院名などが書かれている。

2. 改善の内容と方法

本研究では、前述の課題を改善する方法として、画像資料のデジタル化を試み、その教育研究における効果、とりわけ教育の場面での教材としての有効性を検討した。

(1) 高野山古地図のデジタルデータ化

今回デジタル化した「高野惣山之絵図」(高野山大学図書館所蔵)は江戸時代初期1645(正保2)年に描かれた高野山古地図で、縦横約1.5m x 3.5mという巨大なサイズであり、机に広げて気軽に閲覧できるようなものではない。まず、これの撮影とデジタルデータ化を、専門業者^(注1)に依頼した。撮影には特殊なカメラを使い、絵図全体を8分割してそれぞれを8 x 10サイズのフィルムで個別に撮影した。そのフィルムをスキャナで読み込んでデジタル化し、それをモニタ上で切れ目の出ないようにつなぎ合わせ、一つの画像データとした。

一つにまとめられた画像データは1GB超の容量を持つ巨大なものだが、これを快適に閲覧できるようにするため、大容量画像閲覧

用のアプリケーションソフト^(注2)を用いて格納する。これをパソコンにインストールすれば、「高野惣山之絵図」はモニタ上で高精細かつ快適に閲覧することが可能となる。

(2) 講義でのデジタル「絵図」の活用

こうして完成した「高野惣山之絵図」デジタル画像を、大学院の高野山史に関する講義に利用するという試みを実施した。

高野山は標高800メートルの高地に、東西に細長く開けた山上都市であり、東端部に弘法大師廟のある「奥の院」が、西端部にはかつて高野山参詣におけるメインゲートであった「大門」が存在し、中央部分には密教の中心思想を表現するとされる根本大塔を含む壇上伽藍、および金剛峯寺境内がある。今でこそ高野山といえば、金剛峯寺を中心とする一極集中の宗教都市とみられることが多いが、このようなかたちに高野山が落ち着くまでには、歴史的にいくつかの画期を経なければならなかった。

鎌倉時代に描かれたとされる「高野山水屏風」^(注3)にその様子を窺うことができるのだが、

中世期まで、高野山上には三つの勢力が鼎立していた。現在の高野山金剛峯寺へと連なる「金剛峯寺方」、鳥羽上皇ゆかりの「大伝法院」を本拠としてしばしば金剛峯寺方と対立し、最終的に紀ノ川沿いの根来に拠点を移した「大伝法院方」、鎌倉幕府ゆかりの金剛三昧院を本拠とした「金剛三昧院方」である。これがどのような経緯で金剛峯寺一極集中へと推移していったかについては、主として文字資料をもとに把握する試みがされてきた。

近世までには高野山内が金剛峯寺方によって統合され、今度は山内の僧侶の区分に基づく確執も表面化してくる。高野山では明治時代に入るまで、山内僧侶の間に明確な三つの区分があった。学を主とする「学侶方」、行を主とする「行人方」、そして諸国遍歴をこととする「聖方」の三分である。これらが山内でどのような関係にあったかを押さえることは、高野山の歴史を考える上で重要な要素の一つとなる。端的な表現をとるなら、山内中心部である伽藍の近辺に大きな子院（寺院）を構えることは、山内僧侶にとって自らの力を示すにあたり重要な意味を持ったということが出来る。子院の一つひとつは、それぞれが学侶方、行人方、聖方いずれかの僧侶が守るものとなっている。山火事のような自然災害の影響もあって、子院は山内で場所を移すこともしばしばあったようだが、その移動の様子を時間軸に沿って整理することで、間接的に山内僧侶集団の勢力関係を把握することができるのである。

以上のような作業、すなわち、大伝法院方が高野山を下山し、また金剛三昧院方が統合され、高野山が金剛峯寺一極体制を成立させる過程を跡づける作業、山内における学侶方、行人方、聖方の子院の移動を跡づける作業、すなわち、高野山の空間構造の変容過程を跡づける作業を、これまで重きを置かれ

ていた文献資料とともに、古地図のような図像資料をも援用して進めることによって、高野山の歴史に対する理解はより明晰なものとなり、加えて学生の研究に対する意欲も従来に増して喚起することができる。

以上のような期待をもって、大学院の講義においてデジタル「絵図」の利用を試みた。

3. 実践による改善効果

実際にデジタル「絵図」を利用したのは大学院での密教史演習（山陰担当）においてであり、その活用は、主として、

教室でプロジェクタを用いて「絵図」を拡大投影し、作成当時の空間構造についてクラスで大まかな共通認識を持たせる。

「絵図」データを格納したパソコンを携帯しながら山内を調査し、道や子院などについて「絵図」に描かれているものと現在の異同を確認させる。

山内に現存する子院を走査し、「絵図」に描かれているものと現在残っているものとの間の連続性などについて調査させる。という3方向で進め、それに加えて周辺の集落群について、それらを正確に測量された現代の地図に重ね、「絵図」における空間的デフォルメの様子を確認する作業を進めた。

(1) 教室での上映と当時の空間構造の把握

「絵図」データはインストールさえすればごく一般的なパソコンで閲覧可能であり、その画面はプロジェクターを使って拡大投影することができる。高野山内の空間構造の変容について、まず受講者に対して口頭説明によって大まかなイメージを提供し、その上で「江戸時代初期の山内構造を表現したもの」として「絵図」を上映した。素材とした「高野惣山之絵図」は江戸時代作で現存するものとしては最古とされ、その意味で近世初頭、

中世末期の高野山の空間構造を最もよく表しているものと位置づけることができる。

これを上映しながら、改めて中世から近世にかけての山内空間構造の変容について説明を加えることにより、事前説明による大まかなイメージを、受講者の中でより具体的なものへと膨らませることができた。

(2) 絵図データを携帯した山内調査

現在の山内空間構造の骨格は、おおよそ近世初頭、すなわち江戸時代初めまでにはかたちを整え、現代にまで続いている。したがって、「絵図」に描かれた山内の様子は、子院の移動などはあるものの、ほぼ現在のものに重なるということができる。現在も舗装され、利用されている道路の多くを、「絵図」に描かれている道と重ねることができる。また「絵図」当時には現れていないものの、現在は利用度の高い道路として整備されているという場合もある。

ノート型パソコンに「絵図」データを格納し、それをモニタ上に表示しながら実際に山内を歩いて調査することによって、このような状況を具体的に把握することができる。また、現在では「隣り合う子院の間にできた隙間」以上のものには見えない細長い部分が「絵図」の時代には道として認識されていた、といった発見にもつなげることができた。

このような実地調査を経ることにより、受講者は「山内の空間構造は江戸時代以来それほど大きく変化していない」こと、つまり「現在の山内空間構造は、骨格において江戸時代初期のそれを踏襲している」ことを実感することができ、風変わりな表現を用いるなら、これを通じて「歴史の連続性」を体感することができた。また閲覧ソフトには画像内にテキスト文書をメモ書きできる機能があり、それも有効活用できた。

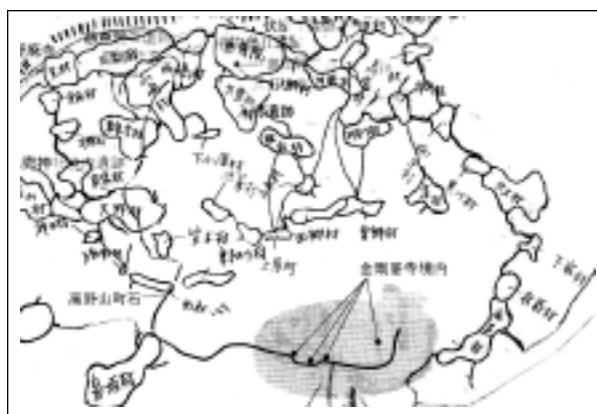


図2 現代の地図に貼りつけた「絵図」内集落

(3) 「絵図」内の子院と現存寺院との対比

「高野惣山之絵図」には膨大な数の子院名が書き込まれている。中には「小坊有」とのみ記され、名称の書かれていないものもある。現在、山内には100あまりの寺院が現存しており、その名称が「絵図」中に見られるものも多い。しかしながら、同じ名称であっても「絵図」に描かれた子院と現存する山内寺院とが同一のものかどうか、必ずしも簡単に同定できるわけではない(中には同一名称の子院が「絵図」内に三つ見つかるといった例もある)。この連続性の有無を確認するという作業を通して、より緻密なかたちで山内の空間構造の変容を把握することが可能になると考えられる。

ただし、この課題については大学や山内に残されている文書資料をも参照することが不可欠であり、全体像を把握するにはなお膨大な作業が必要とされる。現時点では、同一名称であり、現在も「絵図」の時代と同じ場所にあると推測される寺院、同一名称ではあるが、現在「絵図」とは異なる場所にある寺院、「絵図」内にはあるが現存していない子院、という3種類に分け、主としてこのカテゴリーに区分されるものについて資料調査を進めている。

表1 作成中の寺院リストの一部

寺院名	宿坊かどうか	谷	管理寺院	寺格	由緒など 【和歌山県の地名】（日本歴史地名大系第31巻 平凡社 1983年）を参考	本尊	主要な檀越	主要な檀越地
63 心南院	—	千手院	普門院	準別格	普門院内に名跡を残す準別格本山。古くは学侶方の一院で勸学院の北東、南谷の現増福院敷地の北半の地にあった。明治末年に一時蓮花谷の恵光院に置かれていた時期があった。本尊阿彌陀如来。旧地の南側にあった花土院の覚海の弟子で門下四哲の一人高祥寛体房（寛元3年没）の開基という。【紀伊統風土記】によれば本堂・護摩堂・客殿・宝庫・所化寮などがあり、院領35石、室下2院、末寺は東北・信州方面に9ヶ寺あった。	阿彌陀如来		
64 一乗院	○	千手院	普門院	別格	本王院の南、千手院谷の西側にあり、別格本山。本尊は愛染明王。学侶方の一院で、文明5年（1473）の『諸院家帳』は善花の開基とするが、『高野伽藍院跡考』は化千（化仙）上人の住居跡とする。化千は法燈国師と同時代（鎌倉初期）の人物とみられ、院号は、化千が千手堂を再興した時、常に一乘妙典を説講していたことにちなむといわれる。なお別に天元2年（979）に金剛拳寺座主となった定昭大僧都の開基とする説（『高野春報』、『本朝高僧伝』）もある。当院14世清融良仁房は、越	愛染明王	九条家	
65 普賢院	○	千手院	—	別格	普門院の南側に位置する別格本山で、本尊は普賢菩薩。学侶方の一院で、康治2年（1143）の創建、開基は覚鑿の門下で、その送僧に勤めた力乗房と伝えるが、創建直後の久安5年（1149）に炎上、覚鑿の弟子五智房融源が再建。当初は普賢土庫院と称したが、のちに普賢院と改めた（文明5年『諸院家帳』、『紀伊統風土記』）。『諸院家新負頼』に室下は延命院・福寿院の2宇とあり、檀越には尼子家中の三刀谷家・三沢家、福高家中の大橋家、檀越地は出雲・和泉・山城・伊賀・大和にあ	普賢菩薩	橋家家の尼子家中、福三刀家大島沢谷中	和伊泉出雲、山城、大和
66 宝聚院	—	千手院	普賢院	—	普賢院内に名跡のある子院で、本尊大日如来。古くは谷上院谷慈光院の西にあり、学侶方上通の一院であった。文明5年（1473）の『諸院家帳』や『諸院家新負頼』は宝聚坊なる者の開基とするが年代は不明。二世慶源は寛元4年（1246）89歳で死去するといふ。【紀伊統風土記】によれば当時は本堂・護摩堂・客殿・所化寮・文庫などがあり、院領35石、別に御影堂後見料21石4斗半を受けていたのは、宝光院・桜池院とともに御影堂後見二院の一つであったためである。室下2院、末寺は大和・肥後	大日如来		
67 安養院	○	小田原	—	準別格	高野山大学の東方、小田原谷の支谷美相院谷東側に位置する準別格本山。本尊金剛界大日如来。鎌倉時代に金剛三昧院の別院として建立されたと伝えるが開基は不詳。文明5年（1473）の『諸院家帳』には「修理亮骨也、同塔、同鐘樓、御骨堂、佐々日僧正頼助骨納之」とある。【紀伊統風土記】は中興を頼賢意教とし、門前に意教の祠があると記す。また弘治年間（1555-58）に当院16代勢尊阿達梨が毛利元就と師檀の契り結び、鎌元からは毛利家宿坊との一札をもらったと伝える。以後毛	大日如来	家就毛利元利	

4. 共通性（拡大性・汎用性）

本研究の課題は、「高野山の古地図を高野山の歴史を学ぶために利用すること、つまり個別具体的な課題に個別具体的な素材を利用し、その効果を確認することであった。

こうした課題のもと、大学院の密教史演習でデジタル「絵図」を利用したところ、受講者より以下のような反応を得た。まず、何よりも普段学んでいる大学に保管されているが触れる機会のない高野山古地図を詳細かつ間近に閲覧できることは、学生の大きな興味を引いた。既述のとおり「高野惣山之絵図」は江戸時代初期に描かれたもので、つまり中世末期の山内の様子を現代に伝えている。主として中世の高野山の歴史を扱ったこの演習では、この「絵図」を参照することによって、中世高野山の空間構造の変容を、最終的にどのようなかたちに落ち着いたかを念頭に置きながら考察することが可能となった。これにより中世期の文字資料読解に弾みがつき、さらにはその成果を視覚的に確認できる点でもたためになるという感想を得た。

視覚資料のデジタル化は、日本の国宝・重文類の1割近くを有する高野山の資料への拡大も期待することができる。また、「大容量の画像データを素材として、そこに別の資料

から得たデータを付加していくことで、学習テーマのイメージづくりを容易にし、学習者のインセンティブを高める」という視点に立てば、その適用領域はかなり広がるのではないかと期待される。加えて「そもそも従来は専門家でさえ利用不可能といってよい状態にあった歴史的、文化的資料を一般学生の学習に活用できるように加工した」という点での意義も大きい。「物事の理解にビジュアルな素材を活用する」に加え、「従来は利用の困難だったビジュアル素材が、デジタル技術によって利用可能となった」点も、また大きな意義を持つと思われる。

注

- (1) コンテンツ株式会社。
<http://www.contents-jp.com/index.html>
- (2) PFU社製のソフトGigaview。大容量画像の高速閲覧が可能。今回用いたのはスタンドアロンバージョン。
- (3) 京都国立博物館蔵

参考文献

[1] 藤吉圭二: 高野山におけるデジタルアーカイブ。密教文化210, pp.1-30. 2003.

本稿は平成15年度新生わかやま共同研究助成事業による研究成果の一部である。